

1 実践概要

本校は、各学年普通科・家政科1クラスずつの全日制高等学校である。令和2年度から放課後の通級による指導を開始し、令和4年度から特別の教育課程を編成し、授業時間に2単位の通級による指導を行っている。意欲的に取り組む生徒がいる一方で、勉強への苦手意識、不登校経験、コミュニケーションの課題、診断の有無によらず発達に偏りが見られる等、生活上の困難を抱えている生徒が少なくない。教職員も生徒の実態が多様化する中で、授業中の対応の難しさ、一斉指導での指示理解の困難さを感じると共に、できない・分からないと言って諦めてしまう生徒への指導の在り方を模索していた。

初年度は土台作りとして研修会を複数回実施し、教職員の特別支援教育への理解啓発とユニバーサルデザイン（以下UD）についての共通理解を図った。また、本事業の推進チームを組織し、UDの授業実践と一部の教室の構造化を試みた。2年次には校内環境整備としてUD視点による全クラスの構造化と廊下掲示等や図書館の整備、「学びのユニバーサルデザイン」（以下UDL）による授業作りに取り組み、3年次に継続した。生徒への理解啓発としては、インクルーシブ教育に関する授業を行った。全校生徒それぞれの困り感については、「高校生活を充実させるための調査」^{注1}を実施している。

◆キーワード◆ 校内体制 校内環境整備 UDL ダイバーシティ 地域連携

^{注1} 生徒と保護者の困り感を聞き取るためのシート（宮城県総合教育センター作成）

2 令和3年度の取組の概要

主な取組	(1) 基礎研修：インクルーシブ教育とUDに関する研修 (2) 授業実践：授業におけるUDについての検討 (3) 校内環境整備：教室の構造化 (4) インクルーシブ教育：障害理解・共生社会に関する授業実施 (5) 小・中学校との連携：専門家来校日に訪問
成果	(1) 特別支援教育と授業UDについての外部専門家の先生方による研修では、高校でも特別支援教育が必要だということを共通認識できた。 (2) 「授業のユニバーサルデザイン」（以下授業UD）の視点を基に高校における授業のUDの在り方を検討し、専門教科が多い高等学校で取り組むためには様々な工夫または変更が必要であることが分かった。 (3) モデル教室で構造化に取り組み、教職員で共通理解を図る場を設定したことで、足並みをそろえて取り組むことができた。学校図書館の館内表示のUD化と読書補助具、UDに関する資料の充実を図った。 (4) 1学年で実施し、障害や差別について考えることができた。 (5) 各校の取組を知ることで、本校の取組に活かすことができた。

課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・全校で取り組んでいくための体制作り。 ・高等学校で有効な UD の視点を取り入れた授業の在り方。
-----	--

3 令和4年度の取組の概要

主な取組	<ul style="list-style-type: none"> (1)基礎研修：UDに関する研修、先進校訪問 (2)授業実践：UDLとMI理論による授業づくり (3)校内環境整備：全教室の構造化、「生徒と共に考える」掲示方法、学校図書館の館内表示のUD化、UD資料・読書補助具の整備 (4)インクルーシブ教育：ダイバーシティと共生社会に関する授業実施 (5)小・中学校との連携：専門家来校日に訪問、校内環境の情報交換
成果	<ul style="list-style-type: none"> (1)教職員全員で研修したことで共通理解を図ると共に、理解を深めることができた。先進校での取組を参考に、次年度の計画を立てた。 (2)高校の授業の特性を活かし、教員が自分らしいUD授業の在り方を深めていく方法としてUDLを取り入れ、生徒のアセスメント方法として「マルチプル・インテリジェンス理論」（以下MI）を活用した。概念・理論から入ることで取組に対する教員のハードルが下がった。 (3)図書委員会・保健委員会の生徒と共に校内の掲示物の在り方を考え、整理することで、生徒のUDに関する理解が深まった。 (4)全学年でダイバーシティと共生社会について考え、生徒は周辺の多様性について認識した。東北福祉大学と連携して学生と共働で障害理解に関する授業を行うことにより、生徒が深く考える機会となった。 (5)各校の授業を参観することで、高校までのつながりが見えてきた。小・中学校の校内掲示や教室作りについて情報交換を行い、本校の取組の参考とした。
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・UDLとMIの理解を深め、授業実践を積み重ねる。 ・校舎内・教室のUD化の共通理解を深め、推進する。

4 令和5年度の取組（まとめ）

目 標	<p>UDの考えを取り入れた学校の在り方を探る</p> <ul style="list-style-type: none"> (1)UDLとMIを活用した授業づくりを通して、生徒の主体的な学びを育む。 (2)校内環境のUDを進め、学習環境を整える。
目標に対する 主な手立て	<ul style="list-style-type: none"> (1)特別支援教育とUDに関する研修会を行い、教職員の理解の深まりを図る。 (2)生徒が自ら学び、「分かる・できる」ことを感じることができる授業づくりを目指し、MIを使って生徒の特性を把握し、UDLをベースとした授業づくりに取り組む。 (3)生徒と共に校内環境のUDを整え、松山高校のスタンダードを構築する。 (4)ダイバーシティと共生社会についての授業を行い、互いの違いを認め合う人間関係づくりを取り入れる。

	<p>(5)地域の小・中学校外部専門家訪問日に参加し、授業づくりや校内環境について、互いの良さを学び合う。</p>
経 過	<p>(1)UDL と MI を活用した授業づくり</p> <p>4月：令和5年度 of 取組（年間計画等）について説明し、事業の概要について理解を図った。</p> <p>5月：第1回外部専門家チーム訪問：全員で本事業内容と今年度の取組（詳細）を確認し、外部専門家の講師による研修を実施した。</p> <p>7月：UDL について研修し、概念の捉え方について確認をした。</p> <p>9月：第2回外部専門家チーム訪問：1学年音楽I「Clap, Tap, with CUPS」の公開授業で、UDL ガイドラインの中のアクセスと MI で捉えた生徒の特性を基に授業を組み立て、生徒が挑戦する気持ちをもてるための工夫をした。</p> <p>11月：第3回外部専門家チーム訪問：2学年フードデザイン「テーブルコーディネート」の公開授業で、MI の傾向でペアを組む取組を行った。様々なオプションを提供と、生徒の興味関心、意欲を高められるよう教材を工夫した。</p> <p>(2)校内環境のユニバーサルデザインの推進</p> <p>4月：各教室の掲示物と表示を作成して貼り、校内の統一を図った。</p> <p>5月：図書委員会と保健委員会の生徒による合同委員会で UD について研修し、校舎配置図に関する全校生徒アンケートを実施した。</p> <p>10月：5月に実施したアンケート結果を基に校舎配置図を設置した。</p> <p>11月：合同委員会の生徒を中心に、教室案内を設置した。</p> <p>(3)インクルーシブ教育の推進</p> <p>6月：ダイバーシティと共生社会①：1学年 自分と他者との違い、互いに尊重し認め合うことをテーマに意見交換をしながら学習した。</p> <p>12月：ダイバーシティと共生社会②：1学年 ダイバーシティと共生社会を実現する上での課題について、MI のタイプ毎にグループを作って話し合いを行った。</p> <p>(4)地域の小・中学校との連携</p> <p>各校の外部専門家チーム訪問の際に参加し、それぞれの取組や校種による違いについて理解した。</p>
成 果	<p>研修会で特別支援教育と UDL について共通理解を図ったことで、授業づくりに活かすと共に、授業検討会等で共通言語をもって話し合うことができた。UDL で授業実践をすることで、生徒一人一人の学び方に着目し、個別最適な指導の在り方について模索することで、各教科での指導に活かせるものとなった。</p> <p>校内環境の UD 化が進み、生徒が情報を得やすい環境をつくることができた。また、校内美化が進んだ。</p>

課題点	3年間で整えてきたUDについての取組を、今後どのように継続していくかを検討し、各担当に引き継いでいく。
-----	---

5 高等学校での特別支援教育の取組

本校ではこれまでも、生徒の居場所づくりとしての「ほっこりカフェ」や、生徒の社会生活力の向上を目指した「ちゃれんじ松高生」を実施したりするなど、学校全体で生徒に寄り添った取組がなされてきた。そこにUDという新たなキーワードを取り入れるに当たり、全職員が関わり、それぞれが何かしらの変化が得られる取組にしたいと考えた。

1 学校全体での取組

(1) 校内支援体制作り

初年度に「共に学ぶ教育推進チーム」を組織し、6名のメンバーでスタートした。本事業の取組を学校全体に浸透させ、継続した取組にしていくための方策を視点に推進することとした。

2年目にはチーム内で「授業づくり」「校内環境」「地域連携」の担当を設定し、それぞれのチーフを中心に進めることで事業の取組に拡がりが見られた。3年目にも体制を継続することで、校内での推進体制が定着した。

(2) 職員全体での取組

初年度の第2回専門家チーム訪問から全体会を設定し、外部専門家による研修会を行い、特別支援教育やUDについて学び、共通の知識を得る機会とした。また、授業を公開して他校の先生方に参観してもらうことで、教職員の意識の高まりにつながった。第3回の訪問時には、1年の取組のまとめを共有した。

2 UDの視点を取り入れた授業づくり

初年度に授業UDを取り入れてみたものの、自分の授業の中に取り入れにくいという意見が寄せられ、UDLに取り組むこととした。

3 校内環境の整備

1年目は教室環境のUD化を提案し、2年目から全クラスで統一して取り組んだ。また、生徒による図書委員会と保健委員会の合同委員会でUDについて研修を行い、校内環境のUD化に取り組んだ。自分たちで考えて活動したことで、生活の中のUDを意識する生徒が見られるようになった。学校全体の掲示物の情報提供の仕方を整理整頓したことで、生徒自身が必要な情報を得やすくなった。



校舎全体を見る配置図がなく、教室案内表示の書体や掲示場所がバラバラだった。



校舎配置図を設置すると共に、教室案内の表示を統一し、表示する場所も各階同じ所にした。



6 「共に学ぶ教育推進モデル事業」について

(1) ユニバーサルデザインによる授業作り

< 1年目の取組 >

校内研修で「授業UD」について共通理解を図った上で、理科と英語の授業参観を行った。これまでの授業スタイルの中で「授業UD」に当てはまるところに視点を当てて検証し、「授業UD」を進める上での手掛かりを探った。それぞれの授業で「授業UD」のいくつかの視点について既に実践ができていることに気が付いた一方で、「授業UD」で提案されているフレームが、高校の授業の在り方にふさわしいのか、また、今の授業へは取り入れにくいなどの意見があった。

< 2年目の取組 >

高等学校に有効なUDの視点を取り入れた授業づくりについて模索し、UDLとMIを使った授業づくりに取り組んだ。専門家チーム訪問の際に数学と体育、家庭科の授業を公開し検討会を行った。生徒個々の目標達成に向けて生徒が自分に合った学びのスタイルで取り組むことが有効であること、フレームを使うことによってそれぞれの授業者の授業スタイルを創っていけることが分かった。

< 3年目の取組 >

UDLについての研修会を実施して理解を深め、専門家チーム訪問の際に家庭科と芸術科（音楽）の授業を公開し、授業実践を重ねた。UDLの視点とMIを活かした授業をデザインすることが定着してきた。今後は、オプションの提供の仕方の工夫と、生徒個々の学び方に対応した授業づくりが課題になると考える。

(2) 小学校、中学校、高等学校の連携体制構築

松山小・中学校の専門家チーム訪問の際に各校の授業を参観することで、年齢による指導の在り方を知ることができた。小・中学校で取り組んでいる「授業UD」を参観することで、UDLとの関連性について捉え、両方の良さを活かしていくことの必要性を感じた。また、2年目の取組の中で、小・中学校を訪問して各校の校内環境のUDについて情報交換ができたことで、本校の取組を推進することができた。

(3) 研修会による共通理解

外部専門家チーム訪問の度に、大学教授等から特別支援教育とUDについての研修と話題提供をいただいた。職員室の中で特別支援教育やUDのことが話題に上がることが増え、共通言語ができ、教職員の温度差が感じられなくなってきた。これまでの取組と、今後継続していくための礎となった。

< 総評 >

宮城県松山高等学校では初年度に「共に学ぶ教育推進チーム」を作り、一人の担当者に特別支援教育を任せきりにせず、また各担当者がチーム外の教職員に学びのユニバーサルデザインの情報提供をしたり、生徒の実態把握の方法を伝えたりすることにより全教職員が特別支援教育に携わっているという校内体制を構築した。

高等学校としては珍しく、指導案を元に全教員が「音楽」「家庭科」等の授業を参観し、放課後には授業検討会を行い、教科の専門性を超えて生徒の実態把握を行い、分かる授業づくりについて全教職員が一丸となって取組を推進したことが評価できる。

(東北福祉大学 教授 大西 孝志先生)